からしだね

2018年4月号
(537号)

キリストの受難 カトリック池田教会
主任：ノノイ・プラザ神父
住所： 〒563-0041　池田市満寿美町9－26
TEL ： 072-751-2400　FAX：072-753-4624
URL(ホームページ)：http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/ndex.htm

本号の記事の主題など

ノノイ･プラザ神父による巻頭言
「主はよみがえられた」
日生中央･池田合同黙想会のお知らせ
４月の教会カレンダーへの追加と変更
四旬節黙想会に神田 裕神父を迎えて
四旬節黙想会レポート
ソメイヨシノとアラガシが伐木されました
ローナン神父、デニスさんとの日々をかたる
表紙の絵について
黙想会講話を記録したCDを貸出します

巻頭言

主はよみがえられた

ノノイ・プラザ C.P.

教会では復活祭はこれまでいつも、このさきもっと喜ばしい季節です。もちろんわたしたちの主であるイエスが復活されたからです。主であり救い主としてイエスを信じるすべての人びとにとって、復活祭は喜びをもたらすのです。

四旬節のあいだずっと、わたしたちは主がどれほどわたしたちのために苦しんだかを理解してきました。わたしたちを愛してくださるからこそ、最後には自分を死へとおいやる苦しみと悲しみをイエスは受け入れた。だからこそ断食と悔い改めの季節、わたしたちは主御自身が選びだした弟子たちと心をひとつにして、十字架上で主が死を迎えるのを目撃してしまった彼らの悲しみをともにしたのです。イエスの死とともに、よりよき生を求める彼らの望みもまた死に絶えたように見えました。

しかし、そのあとに来たのは御復活でした。イエスは死に打ち勝ったのです！よみがえられたのです。死はもはや主になんの力も持ちえない。わたしたちイエスを信じる者にも主は永遠の命を約束してくださった。主について、われわれと違うところなどなにもないと考えていたわたしたちに、主はみずからの復活によって、死ののちにも命があることを示された。言葉を換えると、われわれすべてを待ち受けているのは暗闇ではなくて光なのです。わたしたちを待ち受けているのは、神の国での永遠の命なのです。これこそ、まことに良き知らせ、お祝いでなくてなんでしょう。

でも、愛するパウロ畠神父とお別れしないといけないのを思うと、復活祭の喜ばしいお祝いも、いささか曇ってしまいますね。きょう４月１日は畠神父がわたしたちとともにおられる最後の日です。11年のあいだ司牧チームと共同して、畠神父がこの教会を指導されてきたのが昨日のことのようです。明けても暮れても教会にいて、教区の人びとのために司牧のさまざまな求めに応じてこられた畠神父、彼こそ、まことひとびとに尽くす人です。

池田教会の信者すべての名において、畠神父、あなたに心からの感謝を献げたい。わたしたちの教会でなさった、あなたの献身的なお働きの日々にたいする感謝です。そのお働きに見あった一年間のサバティカルをとるために池田を去られるにあたり、ご成功をお祈りしております。まもなく始まる一年間の学びのときがほんとうに実り多いものでありますよう。サバティカル終了とともにエネルギーを蓄えてリフレッシュし、どんな形であれ、もういちど司祭の職務に励まれますよう。

最後にみなさん、教区生活の新たな章をはじめるにさいし、よみがえられた主とともに旅を続けようではありませんか。前途に待ち受けるのが、多くの難問であるのは言うまでもない。けれど、もっとともに働き互いに助けあえば素晴らしいことだってあれこれ起こせる、と信じないといけません。

ルカ福音書がかたる御復活の美しい物語から霊感を受けましょう。エマオという村に二人の弟子たちが向かっていました。心は悲しみでいっぱいでした。自分たちの希望が失われたからです。しかし喜びの驚きが待ち受けていました。主がその場におられたのです。最初は身分を隠してともに旅しておられた。けれどついにはパンを割くときに御自身を現されました。二人の心は復活の喜びで満たされたのです。

みなさん御復活おめでとう！

（広報委員会訳）

４月のガラスケースのことば

わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。
生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない

ヨハネ11・25-26

四旬節黙想会に
神田 裕神父を迎えて

四旬節第2主日(2/25)の四旬節黙想会に黙想指導者の神田裕神父は現実と憧れで織りなされた講話(四旬節黙想会のレポート参照)を生活者を彷彿させるお姿(写真右参照)で語られて、強烈な印象を残されました。第二講話の後に開かれた懇談会に参加した子供たちからシニアの人数は50人を超えていました。

四旬節黙想会レポート

研修委員会

今年の四旬節黙想会は大阪大司教区司教総代理の神田裕(ひろし)神父さまを指導司祭にお迎えして行われました。私が神田神父さまについて紹介を受けた時、そのような肩書に、「この人は偉い立場の神父さまだろうか？」と想像していましたが、実際はそうしたお立場には少しも拘らない、気さくで庶民感覚を大事にされているとても個性的な神父さまでした。

講話でのお話の中からもTVをよくご覧になり、お笑いタレントのゴルゴさんやタモリさんがお好きだと、お茶の間の人気者の名前がいくつも出てきました。その中で神父さまが講話のはじめにご紹介して下さったのが『病者の祈り』でした。とても有名な祈り(詩といって良いかもしれません)で、多くの人に親しまれている祈り(詩)です。

私には洗礼こそ受けていませんが、かつて教会の知人で、家庭のことで非常に悩み苦しんでいた人がいました(男性です)。その彼が人づてに「体調を悪くしていて起き上がれないほどらしい」と聞いて、その日の夜遅くに、私はその知人にこの『病者の祈り』をメールにして送りました。それなら床に入ったままでも読めると思ったからです。

その後、また人づてに「少し元気になったようだ」と聞きました。メールで送った祈りが届いたのかもしれません。いえ、そうでないのか、それはわかりません。しかし、マザー・テレサ(コルコタの聖テレサ)も「愛とは自分で行動を起こすこと」と言っています。

何か自分で行動を起こすことで、もし誰かに気づき(インスピレーション)をもたらすことができるとしたら、それは、神田神父さまが講話で話されていた『(主の)変容』と重なるものがあるのではないかとふと考えます。人は何かを受け取ることである時、気づき目覚め、やがて意識が変わることで、その人の姿(＝ありかた)にある種、『変容』が起きるとすればと･･･。

講話後、ゆるしの秘跡をはさんでからは、昼食を交えた親睦会があり、たくさんの方が参加され、神父さまはご自身の下町で育った思い出を面白おかしく話して下さいました(兵庫県尼崎市の阪神電鉄沿線だそうです)。そのほかにも、神戸のたかとり教会に在任中に起きた阪神淡路大震災をめぐって、火災が拡がるのを食い止めたキリスト像のお話(実際は、風の噂で作られた話を、マスコミが記事に仕立てたものだったそうです)や、一方、たかとり教会が被災した地域の人たち、そしてそれを支援する人々のコミュニティーの拠点的役割を果たし、その後一部建物が台湾に移設されたという、興味深いお話もして下さいました。

カトリック司祭の中には、比較的裕福なご家庭で育った方も少なくありませんが、神田神父さまはそうではなかったようです。けれども、そのことをちっとも気に咎めることなく、むしろご自分が下町で育ったことを愉しんでおられるようでした。

それは、決して豊かさを否定するのではなく、逆にそうでない者、たとえば貧しき者、弱き者の立場になることは、イエスの『謙遜』につながってもいるからだと私は思います。遡れば、イエスご自身がお生まれになったのも下町というか、豪華な施設とは程遠い、貧しい馬小屋ででした。そのことは、キリスト教の象徴的精神性のひとつの原点と言えるかもしれません。

そんな時、若い頃に読んだモーリス・ズンデル師(スイスのカトリック司祭)の本の中の『神は貧しかった･･』という一節に衝撃を受けたことを思い出します。他方、イエズス会司祭のラディスラウス・ボロシュ師は、「(イエスは)私たち有限の存在には本

性上不可能な『謙遜』の段階に（略）到達して」おり、「（彼はもはや）“自分自身のために存在してはいなかった”」とも述べています。

私たちは貧しい者、弱き者や小さき者のうちに真理があることをすでに知っています。さらにその中心には、イエスの霊性を見出すことができることを、地震による被災者支援を続けて来られた神田神父さまご自身もよくわかっておられるように私には感じられました。

翼を羽ばたかせて空を往きかう鳥の姿は美しい。でも、鳥はそのことを自覚していません。同じように、人類は古来より、ヒトの意識（自覚）を超えた意識の存在を尊いとしてきました。そして、その方の使わす霊によって私たちは導かれ、ご聖体に養われながら、イエスの『謙遜』を旨として日々を祈りのうちに歩んでいます。そのことを思い起こしながら、今年も復活祭のよろこびにあずかることができることを感謝しつつ、拙稿を四旬節黙想会のレポートにかえさせていただく次第です。

日生中央・池田合同黙想会のお知らせ

5月22日（火）宝塚黙想の家にて日生中央教会・池田教会合同黙想会を開催します。黙想指導者は芦屋教会の川邨裕明神父様です。

詳細は後日お知らせします。

研修委員会

ソメイヨシノとアラガシが伐木されました

2/24にクレーン車などを用いて教会正門の南にあるソメイヨシノ（3株）が切り倒されたれ、聖堂入口前のアラガシは引き抜かれました。大木の幹内部に虫が住み着き、空洞が作られ、倒木によって公道を通る人びとや聖堂建物が予期せぬ被害を被るのを避けるためでした。

既に、初冬に教会門から司祭館に到る通路の両側のツバキとサザンカが抜き取られたのは春から夏にかけて繁殖するチャドクガによる皮膚炎の発症を防ぐためでした。

都市環境にも愛着を持てるように、教会と公道が接するところにあるカイズカイブキの垣根の成育を促し、聖堂壁際に草花を移植し、聖堂壁を清潔にしましょう。その美しい景観を損なわないように駐車・駐輪にも余裕をもって。

ローナン神父、

デニスさんとの日々をかたる

ローナン神父を覚えてますか？平成も30年をかぞえたいま、「ああ、あの人はね‥」と思い出せるひとは、それほど多くはないでしょう。彼がデニス神父を補佐しながら池田で司牧されたのは半世紀前のことだったとか。そのローナン神父がデニスさんの思い出を書いておられますので紹介しましょう。

デニスさんといっしょに池田で働いていた頃をふりかえって、ローナンさんの記憶にもっとも鮮明なのはデニスさんが可愛がっていた「ダックスフント」でした。メスのピコ("PIKO")はふたりの神父さんによくなつき、どこに行くときもいっしょだったようです。食堂(といっても現信徒会館の食堂のように立派ではなくて古めかしい和風お屋敷の狭い食堂)でふたりが三時のお茶を楽しむときも、デニスさんが幼稚園に出かけてゆくときもお供していた、といいます。もちろん子供たちは大興奮。ダックスフントはいまのようにどこにでもいるわけではなくて珍しかったのですね。通路を歩くピコの頭といい、だらりと垂れた両耳といい、とにかく子供たちはこの珍獣を触りたがり、子供たちのペットになっていたとか。パンダさながらですね。

もうひとつ愉快なのは1965年頃の「スバル」が紹介されていることです。いまはアメリカの高速道路でもわがもの顔に疾駆する人気者ですが、当時のスバルは「安かろう、悪かろう」という昔のメイド･イン･ジャパンの見本だったようです。アメリカ人の目から見ると滑稽なほど馬力不足のポンコツ車として抱腹絶倒調で紹介されています。

「ツーサイクル350cc エンジンを背中にしょいこんだこのスバルは、リーン、リーン、リーン、ジャン、ジャン、ジャンてな音がするのだった。油を吹き込んで潤滑させるようにしてあったせいで、排気管からはいつも青い煙がすこし出ていた。」

馬力不足だったスバルにとって、急な坂を登りおえて丘のうえにある雲雀丘の御受難会女子修道会までたどり着くのはいささか辛かったようです。環境汚染の元凶をばらまくオンボロ排気管から放出された青い排ガスは煙となってミサのあいだじゅうたなびいており、ミサを終えて坂をくだって帰途に就くローナンさんは、その有毒ガスを胸いっぱい吸い込んで池田に戻ったとか･･･こんなポンコツに２年ほどデニスさんは乗っていたのですが、やがて評議会が荷物運搬にも適したミニバンに買い換えるように説得したという話です。

ローナンさんがデニスさんと共同司牧に励んでいたこの時代、日本ではキリスト教式結婚式がブームとなっていました。教区の方針に賛同して、デニスさんも布教を兼ねて積極的に教会での結婚式に取り組みました。ローナンさんをおもしろがらせたのは、祭壇のうえにデニスさんが仕込んだカセットレコーダーでした。

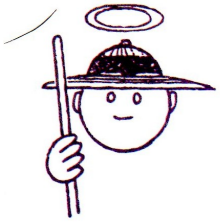
うしろの入り口に花嫁の姿が見えるとデニスさんはプレーボタンを押して「ウェディング･マーチ」を流し、中央通路を進んでくる花嫁が祭壇まで来たところを見計らってカセットを止め祭壇にもどります。挨拶、祈り、聖書朗読が一段落すると、カセットから「アヴェマリア」が流れます。結婚の誓いが交わされて最後の祈りが終わると、「ウェディング･マーチ」再開。曲にあわせて新郎新婦は式場を出てゆきます。こうして式はデニスさんのカセットレコーダー操作によって大成功。デニスさんの手際の良さをローナンさんは称え、当時のブームを懐かしがります。

７０年代以降しばらく続く、右肩上がり黄金時代を予感させるモータリゼーションやキリスト教文化受容の一般化など、ローナンさんの追悼記事には１９７０年代日本の姿が凝縮されているのがわかりますね。

誰にも愛され惜しまれながら帰天したデニスさんへの愛情に満ちたローナンさんの言葉は、「いつも新しい創造的なアイデアを考えだし、誰にでも心をひらき、どんな人でも助けるのを厭わなかったデニス神父は、これからも常にわたしたちの心に生きつづけるでしょう。」と結ばれています。

広報委員会

聖十字架管区のデニス神父追悼号に収録された英文のコピーを畠神父から頂いて、広報委員会が要約しました。



…冒険を恐れない

４月の教会カレンダーへの追加と変更

4月　７日(土)15時～ ラウダート･シを読む会
4月12日、19日、26日（木）　10時30分～
聖書100週間
4月12日(木)14時~16時
福音書を学ぶ会
4月14日(土)14時３０分～
ラウダート･シを読む会

表紙の絵について

『キリストの墓での３人のマリア』ウイーンの画家、ルートヴィッヒ･フェルディナント･シュノール･フォン･カロルスフェルト(1788～1853)が1835年に制作した油彩画。マルコ16章1節から6節の情景を描いている。

安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓へ行った。彼女たちは、「誰が墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石はすでにわきに転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない」

黙想会講話を記録したCDを貸出します

2/25の四旬節黙想会に出席できなかった方などへ講話の音声を記録したCDなどを貸し出すことに致しました。

昨年11月の待降節黙想会において、信徒の方からの要望に応えて、梅原彰神父様の第一講話と第二講話について音声録音したCDの作成を始めました。四旬節黙想会の指導者の神田裕神父様に研修委員会を通してお願いしましたところ、信徒の方々に限った貸し出しを許可していただきました。

広報委員まで申し出てください。

宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

■日帰り黙想会
4月19日(木)10:00～15:30
指導：山内十束神父
4月20日(金)10:00～15:30
指導：山内十束神父

■週末黙想会
4月21日(土)17:00～4月22日(日)15:30
指導：山内十束神父

■韓国語による聖書の勉強
4月25日(水)10:00～15:00
指導：アンドリュー神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎　０７９７(８４)３１１１

編　集　後　記

この冬の厳しさは、格別だった。この北摂の地にも雪の舞い散る日が、例年になく多く感じた。特に2月初旬は、路面に氷や霜が見受けられた。でも、春の気配は着実に増し、花が咲き、若芽が一斉に成長する季節と移り変わる。

小教区にとっても新しい年度が始まる。また今春は主任司祭としてノノイ神父様が着任された。何かしら新たな門出に、ふさわしい予感がする。

天使の微笑